

慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス
研究開発ラボラトリ
Report of 2016

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開設：2012年3月1日

代表者：武田 祐子（看護医療学部教授）

関連 Web Site：<http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html>

連絡先：慶應義塾大学看護医療学部

本ラボラトリーは、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore)、をめざすものである。

■メンバー

武田 祐子（看護医療学部 教授）	ラボラトリー・リーダー 遺伝看護実践研究開発
小松 浩子（看護医療学部 学部長）	がん看護実践質保証研究開発
太田喜久子（看護医療学部 教授）	高齢者看護実践研究開発
野末 聖香（看護医療学部 教授）	精神看護実践研究開発
宮脇美保子（看護医療学部 教授）	倫理的看護実践研究開発
藤井千枝子（看護医療学部 教授）	看護技術研究開発
小池 智子（看護医療学部 准教授）	ベストプラクティス先導ナース開発研究
矢ヶ崎 香（看護医療学部 准教授）	がん看護実践質保証研究開発
小山友里江（看護医療学部 准教授）	がん看護実践質保証研究開発
福井 里佳（看護医療学部 准教授）	倫理的看護実践研究開発
福田 紀子（看護医療学部 准教授）	精神看護実践研究開発
朴 順禮（看護医療学部 専任講師）	看護実践研究開発
新幡 智子（看護医療学部 専任講師）	がん看護実践質保証研究開発
田村 紀子（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
仙波 美幸（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
真志田祐理子（看護医療学部 助教）	高齢者看護実践研究開発
高畑 和恵（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
瀧田 結香（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
西池絵衣子（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
緑川 綾（看護医療学部 助教）	精神看護実践研究開発
井ノ下 心（看護医療学部 助教）	がん看護実践質保証研究開発
伊藤 麻美（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
小林 梢（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
古市 朋子（看護医療学部 助教）	倫理的看護実践研究開発
佐藤 美樹（看護医療学部 助教）	看護実践研究開発
増谷 順子（SFC 研究所 上席所員）	高齢者看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることに力も注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(1) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の3つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボト리의主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボト리의根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者のQOLの向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探求する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

1. 経口抗がん薬治療を受ける患者のアドヒアランスに関するケアの開発 (RCT)
2. 化学療法の副作用症状 (末梢神経障害、皮膚障害) に関わるリスクイベント (転倒) と QOL に関する研究
3. 若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発

小松 浩子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
矢ヶ崎 香 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

がん患者中心の最善のケアの提供を目指し、看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。さらに高齢者を対象とした共同研究を推進し、超高齢者社会が進む日本から国際的に成果を発信する。

B. 計画および実施過程

- 1 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト：多施設共同研究による「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性：ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」の調査を推進する。
- 2 - 1 「安全、安心ケアネット構築」のプロジェクト：抗がん薬治療に伴う手足症候群によるリスクイベントの調査を開始する。
- 2 - 2 分子標的治療を受けるがん患者の皮膚障害と QOL に関する調査を開始する。
- 2 - 3. 化学療法誘発性末梢神経障害のある乳がん患者の転倒に関する研究について、データ収集、分析、論文作成、投稿を進める。
- 3 - 1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」の中の看護師を対象にした調査は、論文作成し、投稿する。
- 3 - 2. 上記の調査のうち、患者を対象に質的研究を行う。個別インタビューによるデータ収集、分析を進め、論文を投稿する。
4. 「身体活動コミュニティワイドキャンペーンを通じた認知症予防介入方法の開発」の分担研究に参画する。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1 - 1. RCT の研究は 3 つの研究協力施設で調査を開始した。現在、参加登録者 120 名まで登録が進んだ。計 200 名の登録を目指し、データ収集を継続する。Study protocol は BMC nursing に掲載された。
- 2 - 1 および 2 - 2 データ収集は終了した。現在解析等を進めており、次年度中に投稿する。
- 2 - 3. 化学療法誘発性末梢神経障害のある乳がん患者の転倒に関する調査について、質問紙によるデータ収集、データ分析を終えた。現在論文執筆中である。
- 3 - 1. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」として、看護師を対象にした質的研究は採択された。
- 3 - 2. 上記研究課題のうち、患者を対象にした調査は「乳がん女性の妊孕性温存に関するカウンセリン

グの体験」は質的研究を遂行し、データ分析、論文を作成し、投稿した。

現在、査読中である。

4. 「身体活動コミュニティワイドキャンペーンを通じた認知症予防介入方法の開発」の分担研究として、コミュニティの高齢者を対象に身体活動の効果や実態等について、質的研究を実施した。分析、投稿を終え、現在は査読進行中である。
5. その他：食道がん患者を対象にしたSTEPプログラムの開発と feasibility study は、2016年に投稿し、採択された。

今後、プログラム受講後の継続フォローアップとして、平成27年1月から月1回、血液内科病棟での定期カンファレンスを実施し、抑うつ状態の患者のアセスメントとケア方法についてのコンサルテーションを実施しており、実践への適用について評価し、教育プログラムの内容を精錬していく予定である。

2. 今後の課題、展望

研究計画、調査実施、論文作成を切れ目なく遂行できるように計画的に進め、がん看護の改善、発展を目指し、国際的にも広く発信する。

3. 2016年度の業績

【受賞】

Komatsu H. Best Presentation Award: ICCNCC 2017: 19th International Conference on Cancer Nursing and Cancer Care: e-poster presentation “A Self-Directed Home Yoga Program for Women with Breast Cancer during Chemotherapy” (Roma, Italy)

【学術論文】

1. Komatsu H, Watanuki S, Koyama Y, Iino K, Kurihara M, Uesugi H, Yagasaki K, Daiko H. Nurse Counseling for Physical Activity in Patients Undergoing Esophagectomy. *Gastroenterol Nurs*. 2016. doi: 10.1097/SGA.0000000000000252.
2. Hamada T, Komatsu H, Rosenzweig MQ, Chohnabayashi N, Nishimura N, Oizumi S, Ren D. Impact of Symptom Clusters on Quality of Life Outcomes in Patients from Japan with Advanced Nonsmall Cell Lung Cancers. *Asia Pac J Oncol Nurs*. 2016. 3(4):370-381. doi: 10.4103/2347-5625.196489.
3. Komatsu H, Yagasaki K, Yamauchi H, Yamauchi T. Patients' Perspectives on Creating a Personal Safety Net During Chemotherapy. *Clin J Oncol Nurs*. 2016. 20 (1):13-16.
4. Komatsu H, Yagasaki K, Yamaguchi T. Effects of a nurse-led medication self-management programme in cancer patients: protocol for a mixed-method randomised controlled trial. *BMC Nurs*. 2016. 15:9. doi: 10.1186/s12912-016-0130-1.
5. Komatsu H, Yagasaki K, Yamauchi H, Yamauchi T, Takebayashi T. A self-directed home yoga programme for women with breast cancer during chemotherapy: A feasibility study. *Int J Nurs Pract*. 2016. 22(3):258-66. doi: 10.1111/ijn.12419.
6. 矢ヶ崎香, 小松浩子, 森明子. 若年乳がん女性のがん治療と妊孕性の意思決定支援に対する看護師の認識. 日本生殖看護学会 (in press)

超高齢社会に求められる高齢者支援方法の開発

太田 喜久子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
増谷 順子 首都大学東京健康福祉学部 助教
真志田祐理子 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

高齢者の健康増進と、QOLの維持・向上を目指した支援方法を開発し、実践の場への適用と普及に向けた取り組みを行う。

B. 計画および実施過程

1. 高齢者施設における看護・介護職への園芸活動研修プログラムの実践
2. 介護ロボット開発と評価に関わる研究

「慶應義塾クラスター研究推進プロジェクトプログラム（長寿）」の補助を得て、理工学部、医学部の研究者と共同で介護機器開発とその評価に関わる研究を実施。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 昨年度に実施した、高齢者施設における看護・介護職への園芸活動研修プログラムの実践に関する研究結果の一部は第17回日本認知症ケア学会大会にて報告し、結果のまとめは海外ジャーナルに掲載された。
- 2) 2016年11月18日六本木での「SFC Open Research Forum 2016」において、プレミアムセッション「みんなでつくる豊かな高齢社会—高齢者の居場所づくりをめざして」を開催した。高齢者が自分らしく過ごせる場をいかに実現するかを議論した。

セッションアーカイブ <https://orf.sfc.keio.ac.jp/2016/session/ps-01/>

- 3) 2017年2月14日オーストラリアでの2017 IEEE International Conference on Mechatronics において、ミニワークショップ "Human-assist Approach for Medicine, Rehabilitation, and Care by Mechatronic Aid" での発表を行った。

2. 今後の課題、展望

計画1：研究にご協力いただいた職員を対象とし、研究結果の報告会開催を提案する。また報告会等での交流を通して、施設で行われている園芸活動の取り組みについての共有と、職員らが抱える悩みやニーズの把握、それに基づいた活動内容を検討する。

計画2：介護ロボット開発に関する評価枠組みの検討を継続していく。

3. 2016年度の業績

- 1) Junko Masuya, Kikuko Ota and Yuriko Mashida (2016), Practice of Horticultural Activities Training Program for the Staff in the Nursing Home, International Journal of Nursing & Clinical Practices, 3(1), 214, 1-3.
- 2) 増谷順子, 太田喜久子, 真志田祐理子 (2016) 認知症ケアに携わる看護・介護職への園芸活動研修プログラムの実践, 第17回日本認知症ケア学会大会 (神戸).
- 3) Kikuko Ota, Mika Tamegai, Junko Masuya, Yuriko Mashida (2017), Trial and direction of support robot in elderly care, Mini Workshop on Human-assist Approach for Medicine, Rehabilitation, and Care by Mechatronic Aid, 2017 IEEE International Conference on Mechatronics, AUSTRALIA.

造血器腫瘍に対する看護師の精神的ケアへの困難感と 学習ニーズに対する調査

野末 聖香	慶應義塾大学看護医療学部 教授
福田 紀子	慶應義塾大学看護医療学部 准教授
緑川 綾	慶應義塾大学看護医療学部 助教
宇佐美しおり	熊本大学大学院生命科学研究部 教授
鎮目美代子	慶應義塾大学病院キャリア開発室 室長
近藤 咲子	慶應義塾大学病院 看護師長
内田 智栄	慶應義塾大学病院 看護師長
河野佐代子	慶應義塾大学病院 精神看護専門看護師
寛 亮子	東京医療保健大学東が丘・立川看護学部 講師

A. 目標

平成 27 年度に実施した看護師への予備的聞き取り調査をもとに、平成 28 年度に患者の抑うつ状態のアセスメントとケア能力を高めるための看護師を対象とした教育プログラムを開発し、プログラムの有用性、実践への適応可能性について評価すること、およびプログラムの臨床活用を行い、評価することを目標とした。

B. 計画および実施過程

開発した教育プログラム『抑うつ状態にあるがん患者をケアする看護師のための教育プログラム』は、①抑うつ状態の理解とアセスメント、②抑うつ状態にある患者の看護ケア、③アサーションと傾聴スキル、④ロールプレイで構成した。2つの大学病院の血液内科病棟に勤務する 46 名の看護師を対象に講義および演習を行い、プログラム受講前、受講直後、受講 1 ヶ月後の 3 時点で、看護師の知識、患者への対応の困難感、コミュニケーションの自己効力感の変化を分析した。この結果から本プログラムに一定の効果が示されたため、看護師の知識やスキルを維持・向上するため臨床における継続学習やコンサルテーションを継続実施することが有用と考えられた。そこで、血液内科病棟において月に一度、抑うつ状態にある患者のアセスメントとケアに関するカンファレンスを実施し評価することとした。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

開発した教育プログラムの評価を行った。プログラムは 2つの大学病院の血液内科病棟に勤務する 46 名の看護師に適用した。プログラム受講前、受講直後、受講 1 ヶ月後の 3 時点で、看護師の知識、患者への対応の困難感、コミュニケーションの自己効力感の変化から評価を行った。分析の結果、看護師の知識得点、患者への対応の困難感得点、コミュニケーションにおける自己効力感の得点が受講後に改善していた。(現在、論文投稿準備中)

その結果を踏まえ、月 1 回、血液内科病棟で抑うつ状態の患者のアセスメントとケア方法についてカンファレンスを実施し、臨床活用を行った。

2. 今後の課題、展望

- 1) 論文投稿する。
- 2) 臨床活用の効果的な実施方法について検討を継続する。

3. 2016 年度の業績

野末聖香、宇佐美しおり、福田紀子他 (2016) : がん患者の抑うつ状態に対する精神看護専門看護師によるケアの効果 - 無作為化比較試験による検討 -, 日本看護科学学会、36、147-155

遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田 祐子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
高畑 和恵 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

- 1) 臨床遺伝看護分野の継続教育プログラムの開発 (研究代表者: 中込さと子 山梨大学)
- 2) 消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上のための研究 (研究代表者: 石川秀樹 京都府立医科大学)

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) については、日本がん看護学会の交流集会において「遺伝カウンセリング開設にむけて 動き出した施設の取り組みと課題 - SIG 遺伝がん看護グループ メンバーからの報告-」を企画し、がん領域における遺伝看護関連の臨床活動の実態や継続教育ニーズに関する情報収集と意見交換を行った。また、教育セミナーでは遺伝性乳癌・卵巣がん症候群 診療の最前線の座長を務めた。
- 2) は、研究班では腺腫性ポリポーシス等、関連 5 疾患の診断基準と重症度分類を作成した。患者団体と共同で患者会活動の実際について研究会で発表を行い、患者支援として、患者団体のホームページ (<http://harmony-life.sfc.keio.ac.jp/>) の充実を図った。

2. 今後の課題、展望

- 1) は、2017 年度にがん看護領域に焦点を当て、遺伝看護学的な看護実践活動に関する学習意欲に関してがん専門看護師を中心に調査し、教育プログラムを検討する予定である。
- 2) は、「消化管良性多発腫瘍好発疾患の医療水準向上及び均てん化のための研究」として継続し、小児から成人にかけてのシームレスなガイドラインの作成を目指す。

3. 2016 年度の業績

1. 武田 祐子 (2016) 遺伝性腫瘍 - 実地臨床での対応を目指して: 遺伝カウンセリングの実際, 日本医師会雑誌 145 (4)
2. 米田 絵莉香, 武田 祐子 (2016) 遺伝性腫瘍における遺伝情報共有のための家族内コミュニケーションに関する文献レビュー, 日本遺伝看護学会誌 15(1)
3. 武田祐子, 小林容子, 土井悟, 高畑和恵ほか (2016.9 月) 家族性大腸腺腫症患者・家族のセルフヘルプ/サポートグループの活動と課題, 第 4 回日本家族性大腸腺腫症研究会 学術集会 (大阪)

1. がん患者へのマインドフルネス認知療法介入に関する効果研究

2. レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス

朴 順禮 慶應義塾大学看護医療学部 専任講師

瀧田 結香 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

がん患者および家族、医療従事者への効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へ心のケアの実践と普及を目指す。

B. 計画および実施過程

- 1) がん患者に対するマインドフルネス教室の有効性について、ランダム化比較試験および質的研究の実施
- 2) マインドフルネスに関するワークショップ等の実施
- 3) 医療従事者のセルフケアに関するマインドフルネスプログラムの開発

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 効果研究：がん患者への RCT 介入は終了し、現在データの分析を行っている。
今後は論文および学会発表により、研究結果を公表する。
- 2) ワークショップの実施：2016 年 12 月神戸大学がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン薬物治療学特論 CASP EBM ワークショップにおいて、「自分と他者を思いやるマインドフルネス」と題して講師を務めた。
また、特定非営利活動法人難病ネットワーク ラ・フェルマータにおいて「心を落ち着かせ自分らしく生きるマインドフルネス」講演会へ登壇した。
- 3) 医療従事者へのマインドフルネスの活用：レジリエンスと思いやりを構築する医療従事者へのマインドフルネス Mindfulness for Health professionals building Resilience and Compassion: MHALO プログラムを開発研究中である（2016 年度勇美記念財団助成金により実施）。

2. 今後の課題、展望

引き続き、がん患者へのマインドフルネス介入について検討すると共に、MAHALO プログラムの研究遂行を目指す。

3. 2016 年度の業績

- ・「自分でできるマインドフルネス」佐渡充洋監訳、朴 順禮他訳、2016、創元社
- ・マインドフルネスは不安障害に対して効果があるのか？ —RCT による効果検証—
二宮朗、佐渡充洋、朴順禮、藤澤大介、佐藤寧子他 第 112 回日本精神神経学会総会、2016 年 6 月 受賞：優秀発表賞
- ・マインドフルネスによる well-being の改善についての単群前後比較効果研究 第 1 報
小杉哲平、二宮朗、佐渡充洋、朴順禮、佐藤寧子、藤澤大介、第 3 回日本マインドフルネス学会総会、2016 年 11 月、東京

肺高血圧症患者の精神状態・QOL とその関連因子に関する研究

瀧田 結香 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

特発性肺動脈性肺高血圧症（I P A H）患者および慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症（C T E P H）患者の精神状態（抑うつ・不安）、QOL、日常生活上の困難を横断的に明らかにするとともに、治療開始前の初診患者に対しては発症後 2 年間の状態を縦断的に調査して治療時期に応じた最良の看護実践を開発し提供する。

B. 計画および実施過程

メンバー：【看護医療学部】瀧田 結香

【医学部】片岡 雅晴、川上 崇史（循環器内科）、藤澤 大介（精神神経科）

【看護部】中野直美（内科外来主任看護師）

- 1) うつ・不安の状態と身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL の状態を以下の尺度を用いて調査する。
 - ・抑うつ状態：Patient Health Questionnaire (PHQ-9)
 - ・不安状態：Generalized Anxiety Disorder (GAD-7)
 - ・身体症状ならびにスピリチュアルな側面を含む QOL：
Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual Well-Being (FACIT-SP)
 - ・全般的 QOL：MOS-Short form 12 (SF-12)
 - ・精神疾患有病率：Mini-International Neuropsychiatric Interview (M.I.N.I) 精神疾患簡易構造化面接法
- 2) インタビューガイドをもとに半構造化面接を行い、患者が抱く思いや日常生活上の困難・苦痛およびニーズを明らかにする。
- 3) 治療開始前の対象者は、初回調査後 6 か月後、1 年後、2 年後にも上記 1) 2) の調査を継続的に実施する。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

医学部および看護医療学部の研究倫理審査で承認を得て、2016 年 11 月より調査を開始し、2017 年 3 月 31 日現在 23 名の調査を完了している。

2. 今後の課題、展望

引き続き、残る 77 名（計 100 名）の調査を進め、分析を行っていく。研究対象を多施設に拡大し、多施設共同研究を行うことも計画中である。また、研究で明らかになった持続皮下注射療法導入中患者の挿入部痛に関する調査も開始予定である。

「先導ナースの養成プログラム」の開発・検証

小池 智子 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

本部門は、看護サービスの開発・質改善を担う「ベストプラクティス先導ナース」に必要な力を高めるため「ベストプラクティス導入・活用プログラム」、「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」を開発し、①プログラム改訂・教材の開発、②プログラムによる教育・提供を研修の提供、③効果の検証、④成果の発信を行っている。

B. 計画および実施過程

1. ベストプラクティス導入・活用プログラム

- ①組織内外の最高の成果を出している実践例（ベストプラクティス）を見つけ出し、自らの組織との差異を分析して改善案を考案・計画し、②適切な目標・評価指標（プロセス評価・アウトカム評価）を設定し、改善活動を行っているが、今年度は Quality Improvement 活動における Process 評価と Outcome 評価の指標設定と測定をより明確にしたプログラムに改訂した。
- (株) ケアコム社の協力を得て、ナースコールデータを活用した Process・Outcome 評価方法を導入した。

2. ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム

- ケース教材の改定、今日的な看護マネジメント課題を素材にしたケース教材を開発し、授業・研修で用いた。授業・研修の効果を評価した。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) 「ベストプラクティス導入・活用プログラム」の実施と評価

- 1つの認定看護管理者教育課程の他、2医療機関で改定した研修プログラムを実施し、計26部署が約8ヶ月の間、医療安全・感染管理・看護サービス等に関する改善活動に取り組んだ。26部署の活動評価（中間・成果発表、成果資料）を分析し、前年度に比して、Process 指標と Outcome 指標の設定と測定を適切に実施している部署が約7割と増加していた。
- 26部署の内、2部署が環境整備ならびに看護職の活動動線の見直しに取り組みの評価に、ナースコールデータとタイムスタディを用いて Process・Outcome 評価を行なった。活動の結果、A病棟はナースコール総数・応答時間に大きな変化はなかったが、B病棟はナースコール総数・応答時間は共に減少していた。A・B病棟ともに、症状マネジメントや退院指導等のベットサイドケア時間が増加し、褥瘡発生や安全などのアウトカムが実施前より大きく改善していた。

(3) Process・Outcome 評価指標を明確に設定し、定期的にプロセスをモニタリングし修正しながら改善活動を実施することができており、改善目標の達成ができた部署が増加した。一方、部署内で高い成果を得たベストプラクティスを組織内で標準化し共有する仕組みや、複数部門の協働による改善活動については課題が残った。

2) 「ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム」

＜ケース教材の検討・開発＞：これまでに開発したケース教材について、制度改革等の医療環境の変化を反映した内容に改定した。また、新たに以下のケース教材を開発した。

①看護管理者の課題に関連したケース：マネジメント専門家チームと医療・在宅ケアのマネジメントに有用な理論と手法について検討し整理し、組織行動と意思決定に焦点を当て「改善活動が定着しない」「中堅看護師5名が退職を申し出た！」の2つのケース教材を作成した。②行政保健師の能力開発に資するケース：住民相談におけるコンフリクトマネジメント等のケース教材を検討した。

＜ケース・メソッド教育による授業・研修の実施＞：開発したケース教材を使用し、1つの大学、3つの大学院（管理・政策分野）でケース・メソッド教育を用いた授業を行った他、認定看護管理者教育課程のファーストレベル3ヶ所、セカンドレベル3ヶ所、サードレベル2ヶ所、職能団体研修会2ヶ所において研修を行った。また、第75回日本公衆衛生学会総会の自由集会「住民クレーム×ケースメソッド」において、保健師等を対象にケース・メソッド教育を紹介し、教育セミナーを実施した。

＜評価・効果検証＞：授業・研修終了後、授業計画と受講者評価（内容方法、習得・達成内容等）を分析した結果、9割以上がマネジメントを学ぶ上で「効果的である」と評価している。40人を越える研修でも、「クラス討論で発言できなかったが、討論を聞いて視野が広がり深く考えることができた」等の評価を得ているが、学びの質を高めるために構成・運営を改善することが課題である。

2. 今後の課題、展望

「ベストプラクティス導入・活用プログラム」と「ケース・メソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」は、効果の検証を行い内容の改善をすすめるとともに、普及に向けた活動（ワークショップ、テキスト作成など）を行う。

3. 2016年度の業績

- 1) 加藤恵里子, 鎮目美代子, 小池智子 (2016) 看護職の退職理由とコミットメント, 第20回日本看護管理学会学術集会 (神奈川) 2016年8月.
- 2) 小池智子 福井トシ子 他 (2016) 地域包括ケアシステム時代の「看護の適正評価」戦略～平成28年診療報酬改定の看護管理影響調査の結果から～, 第20回日本看護管理学会学術集会 (神奈川)
- 3) Tomoko Koike, Rika Fujiya, Toru Aomori (2016) Interprofessional Education Programme for Sustainable Development. The 8th International Conference on Inrerprofessional Practice and Education (Oxford, UK).
- 4) Tomoko Koike (2016) The Challenges for Nursing in Japan in the next 10 years, University of Suffolk Conference, Ipswich, UK.
- 5) 鈴木知代, 深江久代, 小池智子, 他 (2016) 時代にあった保健師現任教育を考えようーケースメソッドを導入したクレーム対応研修ー. 第75回日本公衆衛生学会総会 (大阪)
- 6) 小池智子 (2017) 地域に根ざした強靱な看護マネジメントの創出, 看護管理 27(1), p22-25.

ケアリング文化の醸成

宮脇美保子	慶應義塾大学看護医療学部	教授
福井 里佳	慶應義塾大学看護医療学部	准教授
伊藤 麻美	慶應義塾大学看護医療学部	助教
小林 梢	慶應義塾大学看護医療学部	助教
古市 朋子	慶應義塾大学看護医療学部	助教

A. 目標

・ケアリング文化の醸成

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

・ケアリング文化の醸成

人を人として遇することのできる人材の育成に向けて、ケアリングを基礎教育・実践の場に浸透させていく

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

・ケアリング文化の醸成

- 1) ユマニチュードに関するセミナーに参加し、理解を深めた。
- 2) 人の尊厳に配慮するとは具体的にどういうことなのか、講義・演習・実習を通して学生と関わるよう意識的に取り組む。

2. 今後の課題、展望

・ケアリング文化の醸成

- 1) 教育、看護実践の中に内在している倫理、ケアリングを意識して行動する。
- 2) 対象者の Comfort に配慮した看護技術教育について探求する。

3. 2016 年度の業績

- 1) 宮脇美保子:「看護倫理の事例検討」広島大学病院看護部研修会、2016年6月1日
- 2) 宮脇美保子:特別講演「患者の安全と安心を守る看護 - 専門職者としての倫理と責任」第27回 日本手術看護学会関東、甲信越地区、2016年6月18日
- 3) 宮脇美保子:「看護の日常にある倫理的問題を解決するために」鳥取県看護協会研修会、2016年11月5日
- 4) 宮脇美保子:「新人看護師のための看護倫理」横須賀共済病院看護部研修会、2017年1月12日
- 5) 宮脇美保子:インタビュー記事「自律した専門職へ 倫理を大切に」、月刊ケアマネジメント、2017年1月号
- 6) 宮脇美保子:「看護教育現場における倫理」神奈川県立衛生看護専門学校 FD研修、2017年3月13日
- 7) 伊藤麻美:「看護師の態度に関する文献研究 - 態度の概念に焦点を当てて -」第21回 日本看護研究学会東海地方会学術集会、三重大学、2017年3月4日

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ研究報告会

今年度より、看護ベストプラクティスのメンバーによる研究報告会を実施することとし、年2回開催しました。

看護ベストプラクティス研究開発・ラボでは、3つのプロジェクトに分かれて研究を推進しています。

- ・プロジェクトA：看護実践の質保証研究開発
- ・プロジェクトB：ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発
- ・プロジェクトC：倫理的看護実践のためのシステム構築

第1回研究報告会

日時：2016年8月2日(火) 17時30分～19時00分
 会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎 202教室
 参加費：無料
 報告部門：プロジェクトA：看護実践の質保証研究開発

【報告者】

1. [老年看護]

太田喜久子・真志田祐理子（慶應大学看護医療学部）
 増谷順子（首都大学東京健康福祉学部）

高齢者支援方法の開発

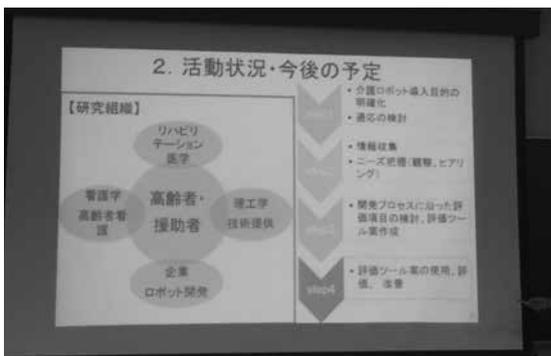
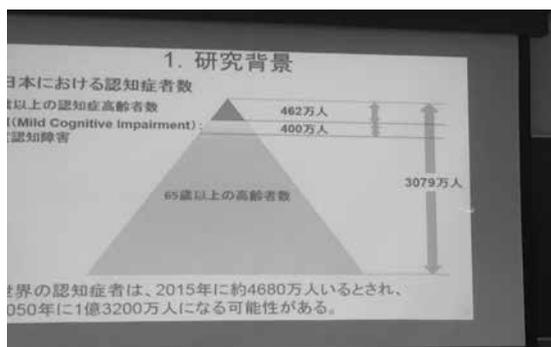
- ①園芸活動の適用を通して
- ②介護ロボット開発過程における評価ツール作成

2. [がん看護]

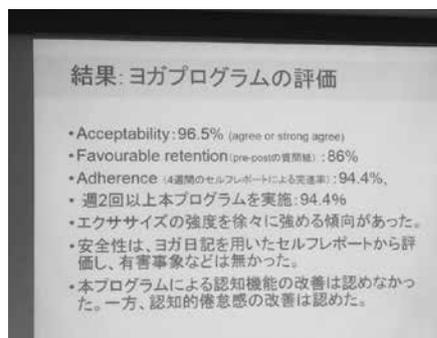
小松浩子・矢ヶ崎香（慶應大学看護医療学部）

「研究を実践につなぐ -がん患者に対するベストプラクティスの開発」

第1回は、高齢者とがん患者を対象とした興味深い発表でした。タイムテーブルはタイトでしたが、フロアとの質疑応答を通して発表内容への理解を深めることができ、実り多き時間となりました。



老年看護グループの発表



がん看護グループの発表と質疑応答

第2回研究報告会

日時：2017年1月30日(月) 17時30分～19時00分
 会場：慶應義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎 202 教室
 参加費：無料
 報告部門：プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発
 プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

【報告者：】

1. プロジェクト B

- ・小池智子 (慶應大学看護医療学部)
 「Quality Improvement 活動における Outcomes 測定」
- ・末吉真由美・村山明子 (国立がん研究センター東病院)
 「病棟における看護師の動線のスリム化の効果」
- ・平岡健志 (株式会社ケアコム)
 「Quality Improvement : ナースコール・データの活用」

2. プロジェクト C

- ・福井里佳 (慶應大学看護医療学部)
 「演習、臨地実習において看護の学びを支援するための教育方法に関する研究: 指導者の『問いかけ』から展開される学生との対話やふり返りに着目して」

第2回は、プロジェクト B では、3 題の発表があり興味深い実践研究報告でした。プロジェクト C の発表に対しては、参加者から「問いかけ」が相手との関係性や学習効果に及ぼす影響について考えるよい機会となったといった感想をいただきました。

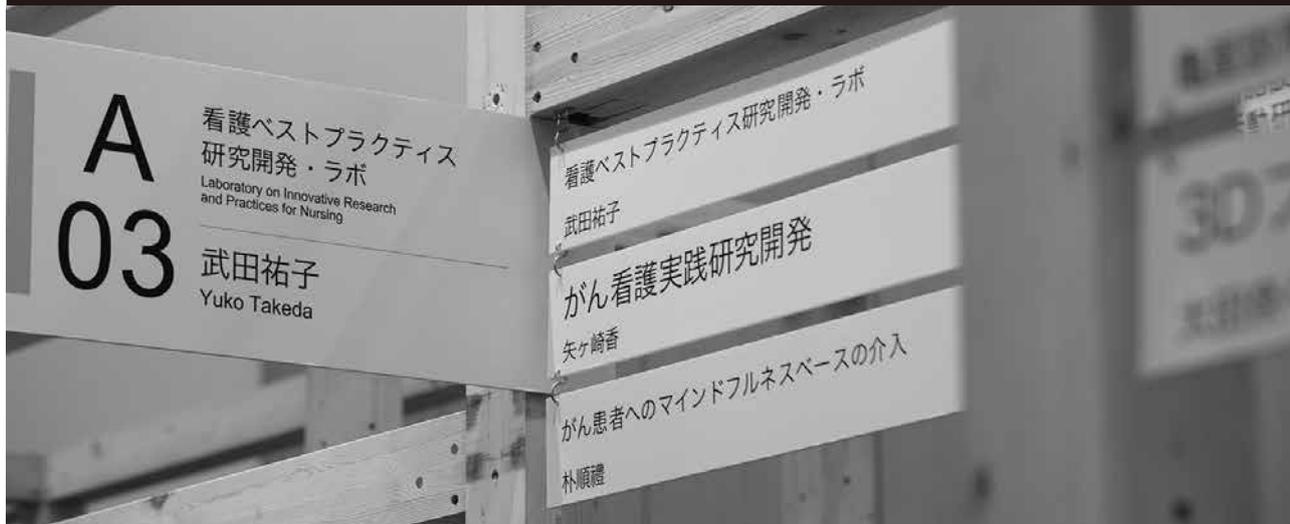


プロジェクト B からの報告



プロジェクト C からの報告

SFC Open Research Forum 2016 への出展・セッション



慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）が主催する SFC Open Research Forum 2016（2016 年 11 月 18 日（金）～ 11 月 19 日（土）東京ミッドタウン（六本木）開催）に、ブース出展しました。「がん看護実践開発研究」「高齢者施設における看護・介護職への園芸活動研修プログラムの実践」「遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究」「がん患者へのマインドフルネスベースの介入」「わかばの会」の展示を行い、看護ベストプラクティス・ラボ全体については展示と共に、出来立てのホームページの閲覧により紹介しました。高校生を始め、学生の保護者や一般の方など多くがご来場くださり、ポスターを熱心にご覧になると共に説明に興味深く耳を傾け、いろいろな質問をしてくださる方もいらっしゃいました。また、ブースで学部紹介動画をパソコンで視聴できるようにしたところ、高校生にはとても好評で、親子で 15 分の動画に見入る方もたくさんおられました。



慶應義塾大学SFC OPEN RESEARCH FORUM 2016
プレミアムセッション

**みんなでつくろう豊かな高齢社会
—高齢者の居場所づくりをめざして**

日時：11月18日(金) 14:45～16:15
場所：東京・港区六本木
東京ミッドタウン・タワー4F
カンファレンス room5

概要：高齢者の居場所づくりに関しての先駆的な取り組みを、さまざまな立場で実施している実践者と、身近な行政の立場からの話を伺い、どのように地域に根差した居場所づくりを推進していけばよいかを、多角的に議論します。

コーディネーター：
太田喜久子 看護医療学部 教授
エイジレス・アカデミー・ラボ代表

パネリスト：
加藤忠相 株式会社あおいケア 代表取締役社長
秋山正子 有限会社ケアーズ 代表取締役
白十字訪問看護ステーション 統括所長、
暮らしの保健室 室長
小泉圭司 元気スタンド・ぶりズム合同会社 代表社員
能勢佳子 鹿児島県肝属群肝付町役場 福祉課参事
肝付町地域包括支援センター 主任介護支援専門員兼保健師

プレミアムセッション関連 慶應義塾大学SFC研究所 ラボ
◆ 看護ベストプラクティス研究開発・ラボ
◆ エイジレス・アカデミー・ラボ
お問い合わせ先：窓口担当 yurikom@sfc.keio.ac.jp

さらに、プレミアムセッションとして、プロジェクト A から「みんなでつくろう豊かな高齢社会—高齢者の居場所づくりをめざして」が開催されました。10代～70代以上の方まで、幅広い年齢層の方がトータルで 70 名程度が参加され、分かりやすい内容だった、役立つ内容だったと、アンケートにご回答いただきました。また、自由記述の感想としては、「自分の老後について想像して楽しくなりました」「こういう活動をやってみたい」などの反応を多くいただきました。この内容は「訪問看護と介護」22 巻 1 号 2017 年（医学書院）にも紹介されました。

勉強会報告

若手研究者の会（わかばの会）



小山友里江・矢ヶ崎 香（慶應義塾大学看護医療学部 准教授）
 新幡 智子（専任講師）
 伊藤 麻美, 井ノ下 心, 筧 亮子, 小林 梢, 佐藤 美樹, 仙波 美幸
 高畑 和恵, 瀧田 結香, 中尾真由美, 古市 朋子, 真志田祐理子, 緑川 綾（助教）

A. 目標

勉強会等を通じて若手研究者同士の交流を図り、研究・教育能力の向上を目指すことを目標に活動を行う。

B. 計画および実施過程

若手研究者が研究・教育の力を伸ばすうえでの課題を話し合い、それに基づいて今年度の活動計画を立案した。実施内容は下記の通りである。

2016年7月：課題の検討

2016年11月：ORFでの活動発表、勉強会の開催

毎月1回：わかばカフェの開催

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

現在の研究・教育活動における課題を抽出するため、まず文殊カードを使用してブレインストーミングを行い、「若手研究者が研究・教育の力を伸ばす上での課題・ニーズ」についてそれぞれ意見を出し合った。その結果、「教育や研究について情報交換・悩みの相談などを気軽にできる場がない」、「教育と研究を両立しキャリアアップして

いくことが難しい」「勉強会など教育や研究に関して学ぶ機会が少ない」ということが現在の課題として明らかになった。以上の結果より、教育・研究について気軽に情報交換が行う場として「わかばカフェ」の開設と2グループに分かれ学習会の企画・開催を計画した。

2) 活動内容

(1) 2グループに分かれての研究・教育に関する学習会の企画・開催

< Aグループ >

テーマ：メンタルヘルスに課題を抱える学生に対する教員としての関わり方（仮）

ブレインストーミングを通して、若手の教員らは、様々な個々の学生との関わりを通して、教育や支援の難しさを抱えていることも明らかになった。

今年度の優先的課題として、「教育：メンタルヘルスに課題を抱える学生対応」が抽出され、このテーマで学習会を開催することが決定した。講師依頼をする過程の中で、学部全体で大学組織の危機管理部門との連携も含めて検討していく必要

合同プロジェクト

があることを示唆頂き、その動向を踏まえて来年度以降に改めて開催することになった。

< Bグループ >

テーマ：若手研究者のキャリアアップしていくためのコツ

～教育と両立しながら研究業績を積むために～

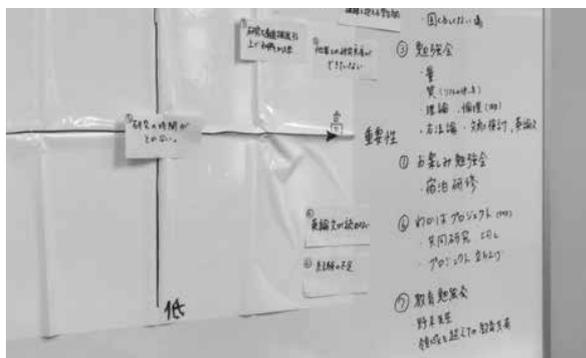
日時：2016年11月9日（水）13:00～14:00
於 SFC 307 教室

講師：矢ヶ崎 香先生（看護医療学部准教授）

ブレインストーミングにより、わかばの会メンバーは、教育と研究を両立させながらキャリアアップしていくことについて苦悩が多いことが明らかとなった。そこで、実際の教育・研究活動を通して、教育者かつ研究者としてのキャリアアップについて考える機会を設けた。当日は、講師に現在の教育・研究活動の取り組みや姿勢についてお話しいただき、新たな研究フィールドの開拓や研究フィールドとの連携・調整の進め方等について活発な意見交換がなされた。参加者からは、教育者かつ研究者としてキャリアアップを目指す上での具体的な取り組みについて考えるきっかけとなり、自己の課題が明確になったという意見が聞かれ、満足度が高い学習会となった。

(2) わかばカフェの開催

「教育や研究について気軽に情報交換を行うことができ、悩みも相談できる場」をコンセプトに「わかばカフェ」を開設した。カフェは毎月1回開催し、気軽に参加できるように事前の参加表明



は不要とし、途中入退室も可能とした。毎回10名前後の若手研究者が参加し、昼食を持ち寄りリラックスした雰囲気の中で、学会や外部の勉強会などで知り得た情報の共有や日頃の悩みの相談などを行うことができた。

2. 今後の課題、展望

- 定期的に勉強会を開催し、研究・教育能力の向上に努める。
- 今年度につきわかばカフェの継続や、わかばの会としてORFへの参加を検討する。

3. 2016年度の業績

- 2016年11月18日（金）～19日（土）、ORF2016にてポスター出展

